

文学翻訳、文化翻訳とは何か

松崎 寛子

もしも台湾で、あなたの知っている日本作家を挙げてと尋ねれば、ほとんどの人が「村上春樹」と答えるのではないかと思います。村上春樹の影響はそれほどまでに大きいのである。日本では昨年十二月一日、トラン・アン・ユン監督による映画『ノルウェイの森』が公開され、大きな話題となったのは記憶に新しいが、日本での上映からわずか一週間後の十二月七日、台湾でも「今年冬天必修恋愛学分（今年の冬の必修恋愛科目）」のキャッチフレーズの下、同作が上映された。映画『ノルウェイの森』公開にともなって、台湾の大手文芸誌『聯合文学』が「村上春樹『挪威的森林（ノルウェイの森）』映画化完全保存版（原文ママ）」として特集を組んだほか、台湾の四大新聞、『自由時報』、『中国時報』、『聯合報』、『蘋果時報』

等のメディアも映画化について大きく取り上げただけでなく、昨年一〇月にオーブンしたユニクロ台北店が「ノルウェイの森」オリジナルデザイン限定Tシャツを販売するなど、村上ブームが文芸界だけでなく、台湾各界を風靡した。村上春樹の最新作『1Q84』のBOOK1とBOOK2も頼明珠により中国語訳されて（時報文化出版）、二〇万冊以上売れ（『文匯報』二〇一〇年九月一三日）、BOOK3の同氏による中国語訳も一〇月一日に出版された。また、雑誌『考える人』二〇一〇年夏号に掲載された村上春樹ロングインタビューも頼明珠訳の単行本『1Q84』之後・特集——村上春樹 Long Interview 長訪談」（時報文化出版）として二〇一一年一月に刊行されるなど、台湾における「村上現象」は止

張明敏著

村上春樹文学在台湾的

翻訳与文化

聯合文学出版社

二〇〇九年「三、五九一円」

まることを知らないかのようなのである。台湾でここまでも深く村上春樹が受け入れられる要因はなんだろうか。

藤井省三は『村上春樹のなかの中国』（朝日選書、二〇〇七年）で、中国語圏における「村上春樹現象」の法則の一つとして台湾↓香港↓上海↓北京と展開する「時計回りの法則」を挙げ、台湾をその起点ならしめた理由に、台湾における知日的風土があると推測している。また、一九九〇年代初期に台湾の高度成長が成熟期を迎えた時、ちょうど「村上春樹現象」が始まったという「経済成長踊り場の法則」も挙げている。そして、一九四五年日本敗戦による日本植民地統治の終息、続いて国民党政府の独裁統治と戒厳

令を体験し、一九八七年の戒厳令解除後の民主化運動とその後の喪失感に基づく『ブルウエイの森』への共感、また台湾社会の「自我(ego)」の出現として読まれる、「ポスト民主化運動の法則」を挙げている。

このような背景をふまえ、台湾における村上春樹の翻訳文学の誕生、そしてその変化と発展について詳しく分析しているのが、張明敏『村上春樹文学在台湾の翻訳と文化』(台湾…聯合文学出版社、二〇〇九年一月)である。張明敏は、アメリカ・コロンビア大学で教育学修士を取得した後アメリカで就職し、約七年間アメリカに居住していたが、その後台湾

に帰国し、高雄第一科技大学で応用言語修士、輔仁大学で比較文学博士の学位を取得した。本書は張の博士学位論文でもある。張明敏が村上春樹文学に触れ、彼女を日本文学研究及び翻訳研究へと導いたきっかけは、何とニューヨーク・マンハッタンでホームレスから村上春樹のエッセイ『遠い太鼓』を買ったことだった。張は本書を出版した二〇〇九年の夏、日本交流協会の助成を受けて東京大学に外国人研究員として滞在した。彼女は東大文学部藤井省三教授を中心にした「東アジアと村上春樹」研究チームの一人であり、現在、清雲科技大学応用外語系助理教授である。

本書は、序章に相当する「研究縁起与

基礎(研究動機と基礎)」から始まり、第一章から第五章、「後記」に至る構成で、付録には台湾における村上春樹作品の翻訳一覧表及び村上春樹に関する評論及び報道の一覧表が掲載されている。まず「研究縁起与基礎」において、張明敏は村上春樹の短編小説「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」が、台湾の全国中学学力統一テストの「国文」科の試験問題に採用されたことを挙げ、翻訳文学も「民族文学」或は「国家文学」の一部になりえることを指摘している。村上春樹が台湾に翻訳文学として導入されるにあたり、翻訳者の動機、戦略、基準はどのようなものであったか、そして台湾の出版社はどうし

蠟人形・銅像・肖像画

—近代中国人の身体と政治

マクロ中国政治

—社会変動の周期性を中心として

遊佐 徹 著 他者の思想文化、論理、技術によって姿を写し取られ、蠟人形、銅像、肖像など様々な「像」と化すことになった林則徐、李鴻章、西太后等を通して、それら「像」が孕む「政治」と「身体」の関係を文化史研究の観点から解き明かす。人名、書名、事項索引を付す。

A5判 ■ 定価2940円

王 元 編著 現代中国社会の動乱10年周期説／現代中国社会動乱の周期性と自律性／現代中国社会動乱の周期性に関する諸問題／現代中国権力中枢の世代変遷／現代中国における政治危機／現代中国における大規模な社会政治運動の発生周期の規則性およびその終結／中国百年の現代化における六度の政治選択／20世紀中国政治運動の特徴と規律：ほか

A5判 ■ 予価2730円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

て村上春樹を受け入れたのか、評論家や学者はどのように村上の翻訳文学を解釈しているか、村上の翻訳文学はどうして台湾でブームになったのか、台湾で形成された「村上春樹現象」は日本のそれとどのように違うのか、そしてその要因はなんであろうか——張は、以上を本書で取り上げる問題として呈示している。

第一章「日本翻訳文学在台湾…一九四五年以後（台湾における日本翻訳文学…一九四五年以降）」では、村上春樹のほか、戦後台湾における日本文学の翻訳の流れを、他の言語の翻訳文学と比較しながら論じている。張氏によると、戦後から一九七〇年代までは、日本語の刊行物が禁止され、アメリカの台湾への経済・軍事支援等から一般的に日本よりもアメリカへの憧れが強かったにもかかわらず、翻訳、出版された日本の小説は一九五〇年代から一九七〇年代までに一四冊から一三三冊と十倍近く増加している一方、翻訳されたアメリカの小説は二四冊から六一冊とその増加は三倍にも満たない。また、終戦直後の台湾では、西洋文学を日

本語から中国語へと重訳するケースが多かったことも興味深い。一九五〇年代、日本文学の翻訳作品が少ないのは、当時の台湾では、日本語原文で日本文学を読む人がまだ多くいたことも原因の一つであるという。張氏によると、日本文学の翻訳のうち、四回のベストセラー現象を起した小説があり、それは一九五〇年武者小路実篤の『愛と死』、一九六六年三浦綾子の『氷点』、一九六八年川端康成の小説、一九八九年の村上春樹の『ノルウェイの森』であるという。一九八六年に頼明珠が翻訳した『一九七三年のピンボール』と『カンガルー日和』の台湾版が時報出版社から刊行されていたが、『ノルウェイの森』は、五人の翻訳グループによつて翻訳され、故郷出版社から刊行された。この時、故郷出版社が打ち出したキャッチコピーは日本の「一〇〇%の恋愛小説」ではなく、「一〇〇%の性愛小説」であった。それに加え、表紙は二体の女性ヌードであり、流暢な中国語に意訳するというもので、ここから、当時の出版社がどのように読者を引き寄

せ、売り上げを伸ばそうとしたか、その戦略が窺えるであろう。

第二章「村上春樹在台湾的文学翻訳（台湾における村上春樹の文学翻訳）」…一九八五—二〇〇八」では、台湾における村上春樹文学の翻訳現象を、(1)一九八五年～八九年、(2)一九九〇年～九四年、(3)一九九五年～九九年、(4)二〇〇〇年～〇四年、(5)二〇〇五年～〇八年と五つの期間に区切って分析している。村上春樹の創作スタイルに惹かれた頼明珠が、八五年、知人の勤める『新書月刊』に村上春樹作品を抄訳して持ち込んだのが、台湾、そして世界で最初に誕生した村上春樹文学の翻訳であった。八六年には、時報出版社の編集者である陳雨航が頼の翻訳した『カンガルー日和』を「遇見100%的女孩」という、読者の目を惹きやすい書名で出版しており、このことは、翻訳者頼だけでなく、編集者の陳氏もが村上文学の重要な「書き換え者（rewriter）」であったことを示している。その後、故郷出版社が刊行した『ノルウェイの森』の翻訳の他に、他の出版社も次々

と村上文学の翻訳を出版するが、九〇年に台湾で著作権法が改正されたことに伴い、各出版社における村上文学翻訳の百花斉放時代は幕を閉じる。正式な版權を取得した時報出版社が、以前他の出版社が翻訳を刊行した村上作品の新たな翻訳を行うことで、村上の翻訳文学は、時報出版社の「金なる木」となっていたのである。また、二〇〇〇年代前半に、村上春樹が台湾の読者へ宛てた手紙が『中国時報』に掲載されたり、村上春樹を長きに渡って翻訳してきた頼明珠が日本で村上春樹本人に会見したことは、台湾の読者と村上の距離を大幅に縮めたとは張は指摘する。そして二〇〇五年を過ぎると、中学生、実業家、大学院生、芸能人そして政治家までと、村上文学翻訳の読者層が多元化してきていることを紹介している。このような台湾における村上文学翻訳の読書史を見ていくと、今の台湾社会における村上受容がすでに十分成熟していることがわかるだろう。こうした成熟度を裏付けているのが、第三章「村上春樹在台湾的文化翻訳（台湾にお

ける村上春樹の文化翻訳）」である。

第三章において、張氏は、出版社、翻訳者といった賛助者、書き換え者（*や* *friend*）達と一般の読者及び村上ファンとの相互作用によって村上現象は長く続いていると論じている。翻訳とは外国のテクストが異なった言語文化を持つ領域において想像の共同体を創造するものである。張氏は、ポストモダン社会における台湾の読者の村上春樹文学への共感があるように生まれたのかを分析する。ポストモダン社会を描いた村上春樹の小説は、村上自身よりも一世代後の一九八〇年代中期生まれの読者にとって受け入れやすいものであった。そして、村上春樹文学は、台湾社会における「文化消費」の記号へと進化して行ったのである。

第四章「『挪威的森林』在台湾的翻訳与文化翻訳（台湾における『ノルウェイの森』の翻訳と文化翻訳）」では、台湾における『ノルウェイの森』翻訳の版本比較と、『ノルウェイの森』がどのように台湾で受け入れられ、文化翻訳へと発展して行ったかの分析を行っている。台湾の

村上読者は、村上文学の翻訳という文化消費を受け入れることで、自我（*ego*）を熟知し、自我を実践していった、と張は指摘する。例えば、二〇〇八年に台湾で大ヒットした映画「海角七号」の主題歌となった「国境之南」の歌詞は、『風の歌を聴け』及び『ノルウェイの森』のコンセプトを真似たものであり、この点は作者自身も認めている。こうした台湾人の主体性を欠いた曲は台湾を主体とする映画「海角七号」にはふさわしくない、とする論調もあるが、これに対して張氏は、村上春樹文学の翻訳を商品として消費し、それを内在化していくことで、台湾の読者は自分たちの新しい文化を創造して行くのであり、それこそが主体性であると反論している。

第五章「村上春樹翻訳文学与華語叙述的改写／重写（村上春樹の翻訳文学と中国語叙述による書き換え（*re-writing*）」では、翻訳文学は国文学の一部を形成しているとして、翻訳文学の重要性を強調している。例えば、多くの若い台湾作家たちが、「村上春樹の影響を受けている」と評さ